

# ピラミッド・テキストにおける バーの現われ

吹 田 浩

## I. 序

本論は、一般に「魂」と訳されることの多い古代エジプトの “*h3*” の現われの、最古の宗教文書であるピラミッド・テキストにおける研究である。この語が「魂」と訳されたのは、古代ギリシアに逆のぼり、今日でもしばしば見られるが、その訳語が不適切であることはすでに今日では定説となっている。今日、このバーについてのスタンダードなモノグラフは *Žabkar* のものであるが、彼はバーの基本的な意味を「力の現われ」および「力の現われたもの」としており、これが定説と言えよう。

では次に問題となるのは、バーの現われを時代および社会層において厳密に記述することであろう。本論で扱うピラミッド・テキストについて、*Žabkar* は、中王国や新王国になってから現われる個人の人格化された agent としてのバーはまだ現われなしとし、一般的特性はすでに述べられているので、以下、バーの現われをコンテキストと機能に重きを置いて、記述する。II ではバーが力の概念であることを確認し、III ではその力の重要性がその獲得に特別な言い回しを要求するほどであったことを見、IV では他の個々の事例を網羅してみた。その過程で、いくつかの新しい知見をつけ加えることもできよう。なお、都市のバーについては論述しない。それには別のモノグラフが必要である。

## II. 力の諸概念とバー：力としてのバー

バーが「魂」という訳語では不自然であることは、これが他の「力」と訳される諸語とパラレルな関係で現われることから理解されうる。

### A. 名詞

- (1) *nfrw(j) 3 m3w htpw(j) 3 ptr in.sn in ntrw*  
*prrt rf ntr pn jr pt prt W rf r pt*  
*b3w.f tp.f šct.f r-gswj.f*  
*hk3w.f tp rdwj.f (Pyr.476a-77b W)*

「見ることは何と美しきことか！ながめることは何と安らぐことか！」  
と彼らは言う。(つまり) 神々は言う。

「この神が天へ行き、ウニスが天へ行くことを。(その時)彼のパウ(pl.)<sup>⑩</sup>は彼の上に、彼のシャト(恐れ)は彼の回りに、彼のヘカウ(魔力)は彼の足元にあるのだ。」

ここでは、バーはシャトやヘカウと共に現われ、明らかに抽象的な力を意味している。これらの諸力が、王をして天へ昇らせているのである。類似の表現は、Pyr.992a-c, Pyr.1472a-cにも見られる。

(2) オー、Nよ。行け。汝がアクのとならんがために。汝がセケム的とならんがために。神として。オリシスの後継者として。汝のバーは汝の中で汝にある。汝のセケム(力)は汝の回りで汝にある。汝の *Wrrt* 冠は上で汝にある。汝の *Mjzwt* 冠は汝の肩で汝にある。(Pyr.752a-53b N)

ここでは、バーはセケム等とパラレルな関係にあり、やはり「力」である。<sup>⑪</sup>死後の王がこれらの諸力によって、神、オリシスの後継者たるのである。

(3) 彼(オリシス)が死なないように。彼は死なないだろう。もし彼が生きるなら、汝は生きる。もし彼が健康なら、汝は健康である。セパド(効力)は汝にある。オー、ゲブよ。ワシュ(誉れ)は汝にある。オー、ゲブよ。バーは汝にある。オー、ゲブよ。セケムは汝にある。オー、ゲブよ。(Pyr.1810c-11c N)

オリシスとしての故王の不死を、それを可能にする諸力を持つゲブ神に祈る呪文である。以下、例を列举しておく。

(4) Mは汝のもとへ来た。オー、ホルスよ。汝が彼にそれ、(つまり)この大いなる、すばらしい、汝がオシリスに与えた言葉を言えるように。Mがそれによって大いとならんがために彼がそれによってセケム的とならんがために。(その時)彼のセケムは彼の中に、彼のバーは彼の背後に、彼のセパドは彼の上にあるのだ。(Pyr.1558a-59b P)

(5) オー、Ntよ。汝のアク(霊力)が汝の中で汝にあらんことを、汝のバーが汝の背後で汝にあらんことを、汝のイブが汝の肉体のために汝にあらんことを、断て。汝の枷を。家にいるホルスとして。投げすてよ。汝の束縛を。ヘンベトにいるセトとして。(Pyr.1921d-g Nt) [類似したものはPyr.2228a-dにもある]

(6) この汝の冷水は、オー、オシリスよ、ブシリシにあるもの、礼拝堂(*Grgw-b3.f*)にあるものである。汝のバーは汝の中にあり、汝のセケムは汝の回りにあり、それはすべての力ある者たちの先頭で確立されてある。<sup>⑫</sup>(Pyr.2010a-b N)

(7) 汝の顔はジャッカルである。汝の肉はアトムである。汝のバーは汝の中にある。汝のセケムは汝の回りにある。イシスは汝の前におり、ネフ

ティスは汝の後ろにいる。(Pyr.2098a—b N)

- (8) Wを清めよ。Wを輝やかさせよ。そのジャッカル湖で。オー、ジャッカルよ。汝がそこで神々を清める(所で)。バーは汝にある。セペドは汝にある。オー、ホルス、緑石の主よ。(Pyr.457a—c W)

## B. 動詞

- (9) オー、レーよ。この汝の言いし事は。オー、レーよ。「オー、息子が」、汝が王的であるが故に、オー、レーよ、「バー的であり、セケムのであり、ワシュ的であり、両腕に活発(*jnj—cwyj*)」であり、歩幅に広いことよ!」ここに私はいる。オー、レーよ。私は汝の息子である。私はバー的である。私はワシュ的である。私はセケムの的であり、両腕に活発であり、歩幅に広い。」(Pyr.886a—87c N)〔類似したものは、Pyr.2120a—21c, 2123a—24bにもある〕<sup>⑩</sup>

上のものには、力の讚美としてのバーの一面がよく出ている。下のものは、すでに見た故王に能力を与える一面が出ている。

- (10) 生きよ!汝が毎日歩き回らんがために。「レーが出てゆく地平線」という汝の名でアクのたれ。ワシュ的たれ。セペド的たれ。バー的たれ。セケム的たれ。永遠に。永久に。(Pyr.621a—c T)

次は、故王に好意を示した神々が、報酬としてバー的になるという変わったものである。

- (11) Nのこのピラミッドとこの建物を美しく、かつ永續させるすべての神々よ。汝らはセペド的になるだろう。汝らはワシュ的になるだろう。汝らはバー的になるだろう。汝らはセケム的になるだろう。(以下、供物の入手, *Wrrl*冠の入手の言葉が続く)(Pyr.1650a—c N)

以下、列挙する。

- (12) 汝はオリオンとして天に達するであろう。汝のバーは天狼星のようにセペド的であるだろう。汝はバー的なのだ。汝はワシュ的なのだ。<sup>⑪</sup>

(Pyr.723a—b T)

- (13) オー、Pよ。汝は行った。汝が生きんがために。汝は行かなかった。汝が死なんがためには。汝は行った。汝がアクたちの先頭でアク的であらんがために。汝が生者たちの先頭でセケム的であらんがために。汝はバー的なのだ。汝はワシュ的なのだ。(Pyr.833a—c P)

- (14) 汝は生まれた、オー、ホルスよ、オシリスに。汝は彼よりもバー的である。汝は彼よりもセケム的である。汝は生まれた、オー、セトよ、ゲブに。汝は彼よりもバー的である。汝は彼よりもセケム的である。(Pyr.144a—b W)

- (15) 汝、自らを魔法の大いなる者、ヌーベトのセト、上エジプトの王の如

くに整えよ。何も汝には失われていない。何も汝には止んでいない。見よ。汝は上エジプトの神々、そのアクウ(pl.)よりもパー的であり、セケム的である。(Pyr.204a—c W)

(16) 汝、自らをホルス、若き者として整えよ。確かに何も汝には失われていない。何も汝には止んでいない。見よ。汝は北の神々、そのアクウよりもパー的であり、セケム的である(Pyr.206a—c W)。

(17) ゲブが汝を導びかんことを。汝が神としてパー的であり汝が〔神として〕ワシュ的であり、汝が汝の体においてセケム的である時\*。(Pyr.209 6a—c N) <sup>②</sup>

(18) ゲブは、九柱神の口から出たもの(言葉)を言った。「タカ、それが奪う時。」と、彼らは言う。「見よ、汝はパー的であり、セケムのだ。」(Pyr.162a—c W)

(19) 汝は彼らのもとへ出てゆく。パー的であり、セペド的である時\*。私のすべての子供(の1人)として。私のすべての子供(の1人)として。ソプドなる汝の名において。(Pyr.1534b—c P) <sup>③</sup>

以上、パーは名詞としては、シャト(恐れ)、ヘカウ(魔力)、セケム(力)、セペド(効力)ワシュ(誉れ)、アク(霊力)、*Wrrt*冠、*Mjzwt*冠、イブ(心臓)、動詞としては、セケム、ワシュ、両腕に活発、歩幅に広い、アク、セペドなど、力の諸概念、あるいは力を感じさせるものとパラレルに現われる。なお、名詞のパーが故王に属するのみでなく、現われる位置が、故王の上、中、背後など自由であることは、これらのパーがヒョウの皮などの具象物ではなく、抽象的力であることを裏づけると思われる。

このように、わざわざ諸力がパラレルに並べられるのはより完全な力の所有をねらったためであろう。冷水の前で(6)、ジャッカルのアトムに変身した(7)、レーの前で(9)、天狼星のようにセペド的である(12前)、生誕時に(14)、完全性を持つ(15)(16)、タカが獲物を取る時のような(18)故王などの力を讃美するだけでなく、故王が昇天する(1)、オシリスの後継者としてアク・セケム的になる(4)、枷や束縛を取りのぞく(5)、生きて毎日歩き回る(10)、オリオンとして天に達する(12後)、生きるために行き、アク達の先頭でアク的、生者達の先頭でセケム的になる(13)、行く(19)のような能力を故人に与え、さらに、ゲブ神に導びかせる(17)強制力をも与えるのである。変った所では、ゲブに故王の不死・健康を保証させる(3)、ジャッカルの清めさせ、輝やかさせる(8)ための前提条件やピラミッドなどを美しく、永続させる神々への報酬(11)としても使われている。

### III. パーの入手方法

故王、神々は、その超人間的な行為のために、諸力をパラレルに並べて、その力を強化する必要さえあった。それほどに「力」は彼らにとって必要不可欠

なものであったのであり、どうしてもその力を手に入れなければならなかったのである。そしてピラミッド・テキストでは、その意味で、いかにしてそれらを手に入れるかについても特徴的に言及されるのである。それは、“*jm*” (それによって) という語によって示される。

(20) 汝、腐敗を知らぬこの汝のパン、すっぱさを知らぬ汝のビールへと、立ち上がれ。汝がそれによってパー的にならんがために。汝がそれによってセパド的にならんがために。汝がそれによってセケム的とならんがために。(Pyr.859a—c N)

供物を受け取ることで、パー的になるとある。次では、「ホルスの目」とあるが、これも供物である。

(21) その香りは汝の上にある。ホルスの目の香りは汝の上にある。オー、Nよ。汝はそれによってパー的となるであろう。汝はそれによってセケム的となるであろう。汝はそれによってワシュ的となるだろう汝はそれによって *Wrrt* 冠を得るであろう。(Pyr.2075a—c N)

次もホルスの目であるが、そこではホルス (新王) のオシリス (故王) への孝行のシンボルとして現われている。

(22) 汝の息子、ホルスは彼 (セト) を打った。彼はその目を彼から奪った。彼はそれを汝に与えた。汝がそれによってパー的にならんがために。汝がそれによってセケム的にならんがために。(Pyr.578c—79a T)

来世への旅立ちそれ自体も、故王にパーを与えるようである。(23)では、ホルスになぞらえている。

(23) 確かに、この汝の出発 (*šmt*) は、オー、我が父、Mよ、ホルスがその父、オシリスのもとへ行くが如きである。彼がそれによってアク的とならんがために。彼がそれによってパー的とならんがために。彼がそれによってワシュ的とならんがために。彼がそれによってセケム的とならんがために。(Pyr.1730a—b M)

(24) オー、Ntよ。汝も又、来い。この汝の出発について言え。汝がそれによってアク的とならんがために。汝がそれによって大いとならんがために。汝がそれによってワシュ的とならんがために。汝がそれによってパー的とならんがために。汝がそれによってセケム的とならんがために。(Pyr.1921a—c Nt)

次例は、ウラエウスのヘビの事であると思われる。

(25) 汝の父のいる所、ゲブがいる所へ昇れ。彼が汝にホルスの額にあるものを与えんがために。汝がそれによってパー的とならんがために。汝がそれによってセケム的とならんがために。汝がそれによって西方者の先頭にあらんがために。(Pyr.139b—d W)

バーは、葬祭用供物、ホルスの目（供物・孝行）、来世への旅だち、ウラエウスのヘビによって入手される。バーの入手は、王の死後の来世への移行の過程に属している。これはこの入手が死後になされることを示すようにも見える。しかし、②5をホルス＝現王とせば、現世時の入手も考えられるし、又、Žabkarの言う如く、古王国の資料の欠落の故に、断定はできない。<sup>②6</sup>

#### IV. 個々の事例

すでに見たように、バーとは超人間的力である。そしてそれは、抽象的な力として名詞や動詞の形で使われるが、さらに同じ力を持つ具象物をも指しうる。本章では、個々の事例を、抽象的力（名詞）、抽象的力（動詞）、具体的現われ（名詞）に分け、記述する。

##### A. 抽象的力（名詞）

ホルスの目とバーとの結びつきはすでに見た。次では、赤冠との関係が言及されている。

②6 オー， Pよ。私は汝にホルスの目を備えた。パウ (pl.) に豊かで、性質 (*wntw*) に数多い赤冠を。それが汝を守らんために。オー， このPよ。それがホルスを守らんために。それが汝のパウを置かんことを。オー， このPよ。2組の九柱神の先頭に。汝の額にいる2人のヘビ女神(のパウ)<sup>②7</sup>として。(Pyr.901a—02b P)

次もホルスの目に関係しており、バーの他神に与える絶対的威力を示している。

②7 青目のホルスが汝に対してやってくる。赤目のホルス，力(アト)の荒ぶる者，そのバーに誰も抵抗できない者に，気をつけよ。(Pyr.253a—b W)  
次も，バーの威力ある一面を示す。

②8 汝のバーは昼にある。汝のふるへは夜にある。神，恐れの主として<sup>②9</sup>  
(Pyr.2110c N)

以上のような力は、さらに神々をして故王に仕えさせることもできるし、故王を来世にふさわしい状態(アク)にすることもできる。

②9 神々は，おじぎをして，Mのためにやって来る。アクたちは，彼のバーの故に，Mに仕える。(Pyr.1144a—b M)

③0 このセケム的な者は。彼のバーの故に，アク的にされた。(Pyr.789aP)  
上2例では，“n”によって原因が示されたが“*hr*”でも同じ意味で使われる。

③1 Ntはヌーを見る。このNtはその道に現われる。讚美がNtに与えられる。Ntはそのパウ故に大いである。(Pyr.1062a—b Nt)

又，次はバーが神々に好意を強制する例である。

③2 彼ら(神々)は汝を天へ，汝を天へ，汝のバーにおいて (*m b3.k*)，連れ<sup>③0</sup>

てゆく。汝が彼らに対してバー的である時\*。(Pyr.799c P)

次は、有名な「共食い讃歌」の一節であるが、問題がある。つまり、定説ではバーを敵のバーと解釈しているが、筆者は王自身のバーとしたいのである。ピラミッド・テキストには、敵のバーは一切出てこないこと、文脈上も「敵」の出現を必要とせず、「燃焼にアク的なる者」とのパラレルな関係から王の力の讃美と取れることが理由である。

(33) Wの導びへビ (*sšm-w*) は彼の額にある。(王の) バーを見る者、燃焼にアク的なる者が。(Pyr.396c W)

又、同じ讃歌の一節には、食された神々の力が王に保有された描写がある。

(34) 見よ。彼らのバウはWの腹の中にあり、彼らのアクウはWのもとにある。……見よ。彼らのバウはWのもとにあり、彼らの影はその所有者たちから(取られて)ある。(Pyr.413a-c W)

以下、列挙する。

(35) Nは、そのバーにおいて、万事好調である。(Pyr.1782d N)

(36) 彼(その座が隠されたる者)は、汝のために天の戸を開ける。彼は汝のために天空の戸をあけ広げる。彼は汝のために道を作る。汝がそれで神の仲間の所へ出てゆかんがために。汝が汝のバーにおいて生きている時\*。(Pyr.1943d-f Nt)

(37) オー、汝、バーにおいてここから洞穴に走る者よ。汝が汝のアクのあとを、風をとらえるために行かんことを。N[z]3tで顕たるケルティの手の如くに。(Pyr.1557b-d P)

(38) オー、Nよ。汝のバーは汝のもとで汝にある。(Pyr.2201a N)

前出の(12)もここに入る。

## B. 抽象的力(動詞)

バーとは力の現われであり、以下の結びつきは自然である。

(39) 彼らは、Wが現われ(*hcj*)、バー的であるのを見る。その父たちを食べて生き、その母たちを食す神として。(Pyr.394a-b W)

次は、強制する力としてのバーである。

(40) オー、ヌーよ。これら(門)をして、Tのために開かしめよ。見よ。Tはやってきたのだ。バー的に。神的に。(Pyr.603c-d T)

次は、「認識能力」として知られるものである。

(41) ホルスは、確かに、バー的である。彼はその父を、「王のつり台のバー」という汝の名において汝に認める。(Pyr.580a T)〔同様なものは、Pyr.767bにもある〕

以下、列挙する。

(42) 汝が美しき女性、大いなる神の娘に、天が地から分かれ、神々が天へ

行く時与えたこれらの汝の2本の指を私に与えんことを、汝がバー的であり、770キュービットの汝の船の先頭に現れた時\*。(Pyr.1208a—09a P)

- (43) オー、このPよ。汝がオンのバーたちのように、バー的たらんことを。汝がネケンのバーたちのように、バー的たらんことを。汝がペーのバーたちのように、バー的たらんことを。汝が、その兄弟たちの先頭にいる生ける星のようにバー的たらんことを。(Pyr.904a—c P)

前出の(32)もここに入る。

### C. 具体的現われ

バーはここでは力あるものへの呼び名として使われている。ピラミッド・テキストでは、バーは独自の形態をもった独自の存在ではないし、*Zabkar* の言うように、コフィン・テキストに現われる *alter ego* でもない。ましてや、新王国に現われる人間の頭をもった鳥ではない。あくまでも、力をもつことに力点を置いた仮の呼び名である。<sup>43</sup>

#### 1. 王

- (44) 私は、バー的なる者、汝らの間を通り行く者である。神々よ。(Pyr.1205a P)

すでに見た、バーの能力を与える一面が示されている。以下も、ここに入れることができそうである。

- (45) Mは、生けるバー、顔のムカデなる者、その顔の神的なる者、混乱を起こす者たちからその体を奪い、その体を取る者である。(Pyr.1098c—99a P)

- (46) Mは、彼(トト神)がとらえるバーとして、彼が神的にするバーとして、下った。(Pyr.1378c M)

故王の後継者として葬祭の儀式でホルスの役をはたす新王が言われている可能性がある個所もあるが、神話と儀式の関係には立ち入らず、神々に入れることにした。

#### 2. 神々

オシリスの例は、2個所ある。太陽神レーの例はない。

- (47) オー、Nよ。汝は神として着かざっている。汝の顔は、オリシス、ネディトにいるこのバー的なる者、大いなる町にいるセケム的なる者として、ジャッカルである。(Pyr.2108a—b N)

- (48) オー、Nよ。千のパン、千のビール、屠殺場の汝のあばら骨のローストミート、広間の *ith* パンへの立ち上がり、座せ。神は、神の供物を備えられている。汝のバーのもとへ来い。オー、オリシス、アクたちの中にいるバー的なる者、セケム的なる者、その場所にいる者、九柱神が王子の館で守る者よ。(Pyr.215a—c W)

さらに、オリシス系のイシスとネフティスと考えられる例が次である。<sup>44</sup>



(49) オン<sup>49</sup>のバーたちの先頭におり、レーに仕え、死者のためにこの悲嘆を行い夜を過ごす2人のバー的なる者は、おじぎをした。(Pyr.460a—b W) オリシス神話で、オリシスに孝行をつくすホルスの例がある。これは、故王につくす新王とも言える。先の(48)の前者は、ホルスカ供物であろう。

(50) 汝のバーが建てた礼拝堂(pl.)がたたえられんことを。(Pyr.1362c P) これは、文脈から新王としてのホルスである。次例(後者)では、詳細はわからないが、ホルスの名が使われている。

(41a) ホルスは、確かに、バー的である。その父を汝の中に、「ホルス、王のつり台のバー」というその名において認めよ。(Pyr.767b T) [Pyr.580 a<sup>60</sup>もある]

次は、明白にホルスであるし、後続分も類似した表現からホルスであろう。

(51) 汝のバーがイルウに住むホルスとして神々の中で立たんことを。

(Pyr.723c T)

(52) オー、Pよ。汝のバーが神々の中で、アクたちの中で立たんことを。彼らの心にあるのは、汝の恐れである。(Pyr.723c T)

(53) オー、Pよ。ホルスの目が汝のもとへやってくる。汝に話さんがために。神々の中にいる汝のバーが汝のもとへやってくる。アクたちの中にいるセケム的なる者が汝のもとへやってくる。(Pyr.763a—b T)

ホルスの4人の息子も現われる。(Pyr.758a—ba P)

(54) オー、Nよ。ホルスは汝のもとへやってくる。そのバーたちを備えられて。(つまり)ハピ、ドゥアムテフ、イムセティ、ケベフセヌウフ。

(Pyr.2101a—b N)

以上は、すべてオリシス系の神であったが、他にウピウ(*Wpjw*)なる神がいくつか現われる。

(55) 生きてあれ。神々と共にあるこの汝の名で。汝はウピウとして現れている。生者の先頭にいるバーとして。アクたちの先頭にいるセケムとして。(Pyr.1913a—14b Nt)

(56) 生きてあれ。オー、このNよ。アクたちと共にあるこの汝の名で。汝はウピウとして現われている。生者の先頭にいるバーとして。アクたちの先頭にいるセケムとして。一なる星として。(Pyr.1899a—d N)

(57) 汝が、ウピウ、生者の先頭にいるバーとして現われんことを。(Pyr.1724b M)

最後に、オン<sup>49</sup>のバーたちの事と思われる破損の著しい例が1つある。

連語として使われるものもある。(58) “*Grgw-b3.f*”は「礼拝堂」の事である。<sup>61</sup>直訳は、「彼のバーが築いた(もの)」ということになる。もちろん、ここでのバーは、葬祭儀式において故王の礼拝堂を建てる新王、つまり、オリシス神話

でのホルスという事になる。他に, Pyr.719a, 1762a, 2010a に認められる。

60) “*pr-b3*” は, 「バーの家」という意味である。詳細はわからないが, Pyr. 1931cに拠れば, このバーは, 当然にも, 恐しい神であったはずである<sup>60</sup>。他に, Pyr.334a, 1930e, 1931bに認められる。

### 3. 非生命体

まずは, ピラミッドの中の石棺の例である。

60) ヌートの言葉: 私は汝の美(体)を, この私のバーの中で, すべての生命, 永遠, 支配, 健康のために, 王のために包む。(Pyr.8h-k N)  
太陽の例もある。ただし, 太陽神レーとは思えない。

61) 汝に万才ノ血の中にいるバー, 父が話しかけた一なる者, 神々が話しかけた賢なる者, 天の頂き, 汝の心が安らぐ所に場所を得る者よ。(Pyr. 854a N) [Pyr.2138gにも同様なものがある]

Faulknerも Sethe も, 夜明けの太陽と見ている。次も, Setheによれば, 太陽である。<sup>61</sup>

62) 汝が平安に目ざめんことを。オー, 東方のバーよ。平安に。(Pyr.1478cP)  
類似したものに以下があるが, バーは複数形である。

63) オー, *Dwn-cnwj* よ。行って, 東方のバーたち, 彼らのアクたちに宣せよ。「このW, 不滅のアクは確かにやってくる。」と。(Pyr.159a-b W)  
まちがいなく星を示すものとして, 「天」を意味する<sup>64</sup> “*h3-b3.s*” が知られる。直訳すれば, 「その千のバー」であり, ここでのバーは明らかに星たちの事である。ピラミッド・テキストにおいては, Pyr.785b, 1285a, 1303cに見られる。

供物とも取れるものは, 前述の(48前)にある。

バーの複数形, バウには「名声」の如き意味のあることが知られる。

65) このPのもとへ昇れ。レーという汝の名で。ホラクティが現われるまで, 汝が天の暗やみを追わんがために。汝がそのバウとその讚美を, 2組の九柱神の口から聞くために。(Pyr.1449a-b P1)

次は, 一連の同一視の一節からである。従って, ここで「ふくらはぎ」がバーと言われているのも, あくまでも比喩である。

66) 私の足のふくらはぎは, *Dr* の畑を支配する2人のバーである。(Pyr. 1314c P)<sup>65</sup>

### 4. 不確かなもの

67) 彼のバーが彼を連れて来る。彼のヘカが彼を身づくろいさせる。

(Pyr.250d W)

ここでは, バーおよびヘカが, 抽象的力として故王に力を与えているのか, あるいは, ホルスや神官のような具体的な人物を指しているのか区分できな

い。次の Utt.451 からのものは、大きな問題を含んでいる。

- ⑥⑨ オー，Pよ。目ぎめよ。身を起せ。立ち上がれ。汝が清くある故に。  
汝のカーが清くある故に。汝のバーが清くあるが故に。汝のセケムが清  
くあるが故に。(Pyr.837a—c P)

「汝のカー」「汝のバー」「汝のセケム」が、王への呼びかけの中で、パラレルな関係にある。これらは何を指しているのか。王その人か、王の力もろもろか、あるいは、すでにバーなどが「完全かつ独立して機能する agent」<sup>⑩</sup>となっていたのか。最初のものでは、suffix pronoun の“k” (汝の) の解釈に困るし、2番目のものでは文意にやや不自然さが残る。最後のものは、ピラミッド・テキストでは早すぎる。

- ⑥⑩ オー，Pよ。汝が清くあらんことを。汝のカーが清くあらんことを。  
アクたちの中にいる汝のセケムが清くあらんことを。神々の中にいる汝  
のバーが清くあらんことを。(Pyr.839a—b P)

同じ呪文からであるが、ここでは、アクたちや神々の中にいるということから、個体と考えられる。筆者は、故王とのパラレルな関係から、これらはすべて王自身を指していると考えたい。王を指すのに、suffix pronoun をつけた力の諸概念の羅列を使っていると考えるのである。

次は、文法的にも、そしておそらく文脈上にも欠点のあるものである。

- ⑦⑩ このPの齒は、バーたちである。(Pyr.1307a P)

他に完全に破損したものがもう1つある。

次では、バーは、決定詞から、ヒョウの皮、ないしそれで作られた衣類であるが、あげておく。

- ⑦⑪ 彼を天へと連れていかないいかなる神も、彼の名誉はないだろう。

彼のバーはないだろう。彼の *p3q* パンはないだろう。(Pyr.1027a—b P)

- ⑦⑫ 汝の衣装はバーであり、汝の衣装はキルトである。(Pyr.219b T)

- ⑦⑬ Wは、そのカーと共に万事好調である。Wがそのカーと共に生きるために。彼のバーが彼の上にあり、彼のアムス笏が彼の腕にあり、彼のアバ笏が彼の手にあるのだ。(Pyr.338a—b W)

- ⑦⑭ 確かに、このPはそれ(天、天空の門)を通るだろう。彼のバーは彼の上にあり、このPのアムス笏は彼の手にあるのだ。(Pyr.907c—d P)

以上をまとめて見れば、以下のようなになる。

Aの文脈——赤冠の力の豊かさ⑥⑩、2組の九柱神の先頭に置かれる⑥⑩、誰も抵抗できない者⑦⑪、昼のバーと夜のふるへ⑥⑩、バーの故に(m)⑥⑩⑩⑪、バーの故に(hr)⑥⑪、バーにおいて⑥⑩⑥⑩⑥⑩⑥⑪、バーを見る導びへビ⑥⑩、故人の腹の中やそのもとにあるバー⑥⑪、故人のもとで故人に属す⑥⑩、セペド的なバー(12前)。

Aの機能——故人を守る(26), 抵抗できない力を与える(27), 恐れを与える(28), 神々やアクたちを故人に仕えさせる(29), 故人をアク的にする(30)(35), 大いになる(31), 神々に故人を天へ連れてゆかせる(32), 神に天の戸を開かせ道を作らせる(33), 洞穴に走らせる(37), 故人の力の讚美(33)(34)(38) (12前)。

Bの文脈——現われ, バー的である(39), バー的・神的である(40), 確かにバー的である(41前), 船の先頭でバー的に現われる(42), オン・ネケン・ペーのバーたちや生ける星のようにバー的である(42), 彼に対してバー的である(32)。

Bの機能——父や母を食す(39), ヌーに門を開かせる(40), 父を認めさせる(41), 指を与えさせる(42), 神々に対して力を持つ(32), 力の讚美(43)。

Cの文脈——王(44)(45)(46), オリシス(47) (48後), イシスとネフティス(49), ホルス(48前)? (41a) (51)(52)(53), ホルスの4人の息子(54), ウピウ(55)(56)(57), 礼拝堂(ホルス)(58), バーの家(59), 石棺(60), 太陽(61)(62), 天(64), 供物(48前)?, 名声(65), ふくらはぎ(62)。

Cの機能——神々の間を通りゆく(44), 自己の体を取り戻す(45), トトに関連して下る(46), 礼拝堂を建てる(50)(58), 神々の中で立つ(51), 神々の中に立って恐怖を与える(52), やってくる(53), 生きる(55)(56), 力の讚美(47)(48)(49)(54)(57)(59)(60)(61)(62)(64)(65) (41a)

もちろん, この分類は暫定的なものである。ただ, バーが文脈においても, 機能においてもかなり幅広い活動範囲をもっていることは知れよう。

## V. 結

バーとは, 超人間的な力, あるいはその力の現われたものである。そして, ピラミッド・テキストでは決して故人から独立して活動する存在ではなく, 必要に応じて故王, 神々に, 非生命体にまであてはめられたのである。もちろん, [1] 彼らがそのような力を持つ, あるいは持つであろうことを顕示, ないし讚美するためである。これが基本である。さらに言えば, [2] 彼らに超人間的な能力を与えるためであり, [3] 他の神々を威圧するためであり, さらには [4] 他の神々に好意を強制するためでもある。故王中心<sup>⑤</sup>の葬祭文書として, 当然の如く数は少ないが, 故王以外の [5] 好意を示した神への報酬として, あるいは [6] その好意を要請する前提として, バーが使用されることもある。

[1] 力の顕示 (讚美)——(6)(7)(9) (12前) (14)(15)(16)(18)(20)(21)(22)(23)(24)(25) (26前) (33)(34)(38) (41後) (43)(47)(48)(49)(54)(57)(59)(60)(61)(62)(64)(65)(66)

[2] 能力付与 —— (1)(2)(4)(5)(10) (12後) (13)(19)(31)(35)(37)(39) (41前) (44)(45)(46)(50)(51)(52) (53)(55)(56)(58)

[3] 神々の威圧 —— (26後)? (27)(28) (32後)

[4] 好意の強制 —— (17)(29)(30) (32前) (36)(40)(42)

[5] 好意への報酬 —— (11)

[6] 好意要請の前提 (好意者への能力付与) —— (3)(8)

単なる力の顕示か、あるいはさらに能力付与などまでも意味するのか区別するのはむづかしい。上では、前後に動詞があれば機械的に能力付与などに分類した。一応の分類である。

さて、次に我々が気づくのは、その用法の広さである。その使用が特定の領域に限定されているとは思えない。例えば、宗教的領域ではしばしばオシリスと太陽神レーの対立を大きく見る向きもあるが、パーはどちらにも偏していない。「天へ行く」などは太陽系であるが、「オシリス」「イシス・ネフティス」<sup>⑤</sup>「ホルス」などはオシリス神話系である。要は、役に立てばよいのであって、極めて融通が効いている。筆者は、このようなパーの特性の前提を、「パー概念の中立性」と呼びたい。以後も末期時代まで、パーは存続してゆくのみではなく、その概念を発展させてゆく理由がここにあるのである。

なお、付加的知見として、ピラミッド・テキストには敵のパーは存在せず、共食い讃歌の一節は王のパーであること、“b3 m”に「一に対して威圧的である」の訳を、そして suffix pronoun のついた形で故王自身を指す可能性を提示しておく。

#### 註

- ① 紀元後5世紀のエジプト人、Horapollo は、その著書 Hieroglyphica の中で「バイ (bai) はプシューケーであり、一方ヘート (hēth) は心臓である。心臓は、エジプト人によれば、魂の容器である」と述べている。See Alexander Turner Cory, *The Hieroglyphics of Horapollo Nilous* (“Chthonios Books”; reprint; 1987), p.15f.
- ② 大きな影響を与えたものとして、Sethe がパーを肉体と対立する靈的なものと述べたことがあげられる。これは、Žabkar の言う通りである。See K. Sethe, *Übersetzung und Kommentar zn den altägyptischen Pyramidentexten*, I (Leipzig, 1909), pp. 15, 158. さらにもう1つは、パーをその文字での鳥の姿（前期はトキ jabiru, 後期は人間の頭とヒゲをもつ空想の鳥）と安易に結びつけたものがあげられる。例としては、*Encyclopedia of Religion and Ethics*, vol.11 (1920), p.752, “Soul (Semitic and Egyptian)”に見られる。
- ③ E. g. J. Vandier, *La religion égyptienne* (dixième édition; Paris, 1949), p. 131.
- ④ Louis V. Žabkar, *A Study of the Ba Concept in Ancient Egyptian Texts* (“Studies in Ancient Oriental Civilization 34”; Chicago, 1968).
- ⑤ *Ibid.*, p. 161f.
- ⑥ 同様な定義が同年 (1968) に出ている。

Elske Marie Wolf-Brinkmann, *Versuch einer Deutung des Begriffes “b3” anhand der Überlieferung der Frühzeit und des Alten Reiches* (Freiburg i. Br., 1968) であり、彼女の定義 (p.12) によれば、パー (名詞) は “die Gestaltfähigkeit; der Gestaltfähige; die Verkörperung; das Erscheinungsbild nsw.”, パー (動詞)

は“gestaltfähig sein ; sich verkörpern”である。彼女は、訳をほとんど“—fähig”でしており、Dieter Mueller の批判 (BiOr vol. 28, 1970, p.344) もあり、筆者も不適切さを思う。「体験」が問題である。又、以下も同じ線上にある William A. Ward, *The Four Egyptian Homographic Roots B-3 : Etymological and Egypto-Semitic Studies* (“Studia Phol : Series Maior 6” ; Rome, 1978) で、彼の定義 (pp.73—75) は、“be endowed with supra-mundane power,” “supra-mandane power” である。最後に、Žabkar 以前のパーへの試みを述べておく。まず、「本来、神が動き回り、多くの姿を取るためにもっている能力」(J. Vandier, *op. cit.*, p. 131) があり、一方“modes of appearance,” “shifting modes of its being” の1つ (A. H. Gardiner, *The Tomb of Amenemhet*, London 1915, p. 99), “Erscheinungsform allerlei machtvoller Wesen,” (H. Kees, *Totenglauben und Jenseitsvorstellungen der alten Ägypter*, Leipzig 1956, p.39) が主なところであり、これらは Žabkar の説で吸収されるだろう。

- ⑦ L. V. Žabkar, *op. cit.*, p.97f.
- ⑧ 故意、ないし歴史的忘却によって、名を隠された、力ある者たちであるが、本来何であったのかは議論がある。以下には、まとまった議論がある。L. V. Žabkar, *op. cit.*, pp.15—36, E. M. Wolf-Brinkmann, *op. cit.*, pp.64—84.
- ⑨ *m3w*, および *ptr* の目的語としての *sdmt.f* 形と取った。Cf. James P. Allen, *The Inflection of the Verb in the Pyramid Texts* (“Bibliotheca Aegyptia” ; Malibu, 1984), s. 469.
- ⑩ “Intensive plural.” Cf. L. V. Žabkar, *op. cit.*, p.55.
- ⑪ 「彼のパーは彼の上に、彼のヘカウは彼の両側に、彼のシャトは彼の足元にある」(Pyr. 992cP) ; 「彼のパーは彼の上に、彼のシャトは彼の両側に、彼のヘカウは彼の足元にある」(Pyr.1472b—c P)。パーは単数形であり、それぞれ少しづつ位置が異なっている。後者は、それぞれが具象物よりも抽象的力を示唆すると思われる。
- ⑫ *Wrrt*冠や *Mjzwt* 冠とのパラレルな関係から、ここでのパーやセケムが具象物を示す可能性がある。パーではヒョウの皮やキルト、セケムではセケム笏である。しかしもっとありえるのは、古代エジプト人自身、具象物と抽象概念を区別していなかったことである。問題であったのは、力の体験であったろう。
- ⑬ “*o3*” 「大いなる」の目的節。訳に不自然であるが、直訳を重んじた。
- ⑭ 原文は、“*3h n.k n.k*” であるが、“*n.k*” は1度で十分であろう。
- ⑮ パラレルな関係を重視し、“*n dt.k*” を副詞として訳した。
- ⑯ アクとパーの節の位置が入れかわっている。
- ⑰ “*jmjw Ddw jmjw Grgw-b3.f* と読んだ。See R. O. Faulkner. *The Ancient Egyptian Pyramid Texts* (Oxford. 1969). Utt. 676 n. 4.
- ⑱ “*nb*” ではなく“*k*”と読んだ。Cf. *Ibid.*, Utt. 676 n. 5.
- ⑲ 人称は、Faulkner に拠った。
- ⑳ *sdmtj.fj* 形つまり未来形。
- ㉑ 人称は、3人称から2人称に変えた。Cf. *Ibid.*, Utt. 599 n.3.

- ㉔ 語呂がある。天狼星 (*Spdt*) とセプド的 (*spdt*)。
- ㉕ *j. b3.k b3tj w3s.k w3stj*. それぞれ前部を substantive と取り, Old Perfective を Rheme として, 王のパー・ワシュ的なることを最高に強調していると解釈した。(13)も同じ。
- ㉖ Old Perfective を「時」で訳す場合に, \*をつけた。
- ㉗ 彼らとは, 運搬人 (*jnsw*) や急使 (*snjw*) で, 王の前におり, 彼らがレーに王のことを伝えるのである。
- ㉘ Cf. R. O. Faulkner, *op. cit.*, Utt. 578 n. 2.
- ㉙ これらは, 当然, それぞれ独自の領域を持っているはずであるが, 今日なお区分できない。
- ㉚ “*nb*” は “*k*” に修正。
- ㉛ Cf. R. O. Faulkner, *op. cit.*, Utt. 214 n.7.
- ㉜ L. V. Žabkar, *op. cit.*, pp. 56—67, 160.
- ㉝ パウ (pl.) と *wtwjtj* (ヘビ女神の双数) が “*m*” で結ばれているので, *wtwjtj* の前にパウが省略されていると考える。
- ㉞ Cf. James P. Allen, *op. cit.*, s. 592.
- ㉟ Faulkner は, “with your soul” と訳し, パーを個体と見たのであろう。その際, 彼は, おそらく, ヒエログリフの鳥を思い浮かべている。See R. O. Faulkner, *The Ancient Egyptian Coffin Texts I* (Warminster, 1973), Spell 312 n. 2.
- ㊱ *j.b3 jm.sn*. ここでは, パーは威圧する力であり, “*m*” は「一に対して」の意となる。
- ㊲ R.O.Faulkner, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, Utt. 273—4 n. 8 ; K. Sethe, *op. cit.*, I, p. 149.
- ㊳ Faulknerは, “bird-shape” と訳す。
- ㊴ N (ゼーテの版) は, 「パー的ならんがために」を持つ。
- ㊵ *j(r) nw*. See R. O. Faulkner, *op. cit.*, Utt. 581 n. 5.
- ㊶ あるいは, 「パーに関して現われる」と訳すべきか。
- ㊷ “*b3*”も “*n1r*”も Old Perfective と取る。Cf. A. H. Gardiner. *Egyptian Grammar* (3rd ed. ; London, 1957), ss. 573cc, 581.
- ㊸ Cf. L. V. Žabkar, *op. cit.*, p.72.
- ㊹ *Ibid.*, p.97f.
- ㊺ その際, その力点が置かれたパーが, 呼ばれた者自身のものか, 他神から分け与えられたものかの区別が, 理論上, ありうる。神のパーは, 他の神, 動物, 非生命体に現われることができるからである。See *ibid.*, pp.11—15. これは, 本論で述べる王や神が, 彼ら自身ではなく, 彼らのパーが現われた代理人の可能性あることを意味する。パーの変身能力とは, この融通の効く一面を指しているのである。そして, これは神話と儀式の関係の問題に行きつくことになるので, 本論では触れない。
- ㊻ Cf. K. Sethe, *op. cit.*, II, p.254 ; R. O. Faulkner, *op. cit.*, Utt. 302 n. 3.

- ④⑤ 「……オンを支配するこれらのパーたち」(Pyr. 2248b JP11).
- ④⑥ Cf. R. O. Faulkner, *op. cit.*, Utt. 262 n. 9.
- ④⑦ W. A. Ward (*op. cit.*, ss. 39-41) は、パーそのもの(力)とその現われは区別しなくてはならないとし、後者はパーを反映している器であるとしている。本例では、石棺はヌート女神のパーを反映している器であって、パーそのものではないということになる。しかし、筆者はむしろそのようなパーの柔軟性に注目し、その現われ故に、石棺もやはりパーとしたい。
- ④⑧ 実際には、種々の称号や名が続く。
- ④⑨ Cf. R. O. Faulkner, *op. cit.*, Utt. 456 n. 4.
- ⑤⑩ See K. Sethe, *op. cit.*, V, p. 428f.
- ⑤⑪ Cf. L. V. Žabkar, *op. cit.*, p.14.
- ⑤⑫ Cf. *ibid.*, pp.61-67.
- ⑤⑬ 私のふくらはぎは2人の神のようにすばらしい、の意。
- ⑤⑭ Cf. *ibid.*, p.71. Žabkar も、意味する所を言うのはむづかしいとしている。
- ⑤⑮ *Ibid.*, p. 98.
- ⑤⑯ Žabkar (p.98) は、「中王国および新王国において完全に発展する人格化への初期の傾向を示す」ことは十分にあるとしている。
- ⑤⑰ コフィン・テキストには、複数の力の概念が単数代名詞で指される個所があり、これは指された者が一者、すなわち故人自身を指すと考えられ、この考えを補うと考える。See CTII, 111c, i-k, VI 67a-d, e, i-k, 69a-c, 71a-g, h-j, 71k-72d, 82a-e, 83g-84d, 85f-g. 複数で指されるものもある：CTV240d-e, 242d-f.
- ⑤⑱ *jbḥw P pn b3w.*
- ⑤⑲ Pyr. 2133b.
- ⑥⑰ これは、パーの“punitive aspect”として知られる。Cf. L. V. Žabkar, *op. cit.*, pp.85-89; H. Kees, *op. cit.*, p. 38.
- ⑥⑱ Cf. E. M. Wolf-Brinkmann, *op. cit.*, pp. 54-56. 不十分な分類がある。
- ⑥⑲ 屋形禎亮(筑摩文学大系1古代オリエント集 昭和53年, p.430)氏は、「『パー』はもともと太陽神の属性であつた」と述べるが、少なくともピラミッド・テキストにはそのような傾向は全くない。

末尾ながら、多くの先生・先輩諸氏に御世話になった。御礼申し上げる。特に、本学加藤一朗教授、および梅咲優子さんには感謝申し上げます。